



パープル

第46号

高村昌憲個人誌

高村昌憲・個人誌 《*Takamura Masanori · Kojin-shi*》

詩

否定の精神 高村昌憲

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十三） 高村昌憲訳

思い出

夢

春

あなたの朝のために

評論

初期プロポ断想（二十九） 高村昌憲

1 偶然と運命

2 恋愛から友情へ

3 公開講座

4 立方体

編集後記

悲惨は感動を生まないだろう  
虐げられた人々の傷は深いが  
それでも悲壮感は邪魔だろう  
独裁者に打ち克つための自我

独裁政権に抵抗するばかりでなく  
ピノチェトの傲慢を言えば連行され  
仲間の名前を言わせる拷問のあげく  
証拠隠滅で屍も消えた行方不明者の群

世界中の国には社会主義国になっても  
国名ばかりが共和国でも虐殺があった  
悲惨を封印した儘にして湧く選挙の雲  
独裁者を追放したのはテレビ画面だった

悲惨な思い出だけでは勝てない選挙  
未来を架橋するためだった現在の否定  
独裁者を信任する筈だった大統領選挙  
モネダ宮殿の噴水の水は最早戻らない

現在を肯定する者に未来は語れない  
地球の裏側の歴史は否定から始まる  
真の民主主義国家に虐殺は要らない  
正しい民主主義には否定の精神がある



チリのサンティアゴ市内にあるモネダ宮殿中庭の噴水（2014年7月筆者撮影）

## 思い出

皆が歌い 皆が生まれ変わる リラの花は咲く  
そしてざらざらとした冬がついに終わりになる  
もう緑色の葉のざわめきは黒い墓石を隠し  
希望は翔び 鳩が囁いているのを私は聞く  
爽やかな朝の小鳥はシャンソンを思い出す  
小鳥のさえずりが泉に答えている  
次の祭に向い 上手に編んだような巣に向って  
あなたには家の壁に映った飛ぶ鳥の影が見えるの？  
皆は思い出す 皆は何も忘れていないと言う  
今では小低木の上に広がった周縁が  
新鮮な緑色の葉と繊細な葉脈を広げている  
季節に忠実な蕾には同じ花々が眠り  
昔からの香気と 昔と同じ色彩が眠り  
幸せの花飾りと一杯になった籠が眠る

そんな風に苦しかった長い冬が過ぎて  
私の心と夢はそれ自身の上に撓んで眠り  
思い出を目覚めさせて 急いでいる波を感じ  
高速の帆船のように運んでいくのは愛の波  
何もかもが新鮮に映るあなたのイマージュ  
涙が拭われたように 崇められているあなたの微笑み  
そして私には二つの美しい花のようなあなたの両眼

(ガブリエルへ 一九三〇年四月七日)

## 夢

---

物思いに耽ったような波と楡と蒸気で煙る夜  
その視線は愛された体の上で活気を失い  
霧が立ちこめて物の輪郭を濡らす  
大気は詩をつぶやき 周囲には  
松の木の甘い揺り籠と謎の不穏なざわめき  
絹のような愛撫がリズムをつけて髪を伸ばす

私たちは何処にいるの？

あなたの手はそっと私に話しかける

従順でしなやかで元気そうな肩の上に  
止まっている鳥のように そして大変に軽そうに  
草よりも重そうなのは薔薇色の水滴

夕闇の陰が長くなって 道を遮断する  
そして私たちの思い出と明日の処女を遮断する  
金色の小道のように真新しい線が続き  
蒼い夕暮れが小湾の上にデッサンの線を描く  
大空は震えて 私たちの足元の明かりを消す  
水平線の中に 大変に長い間監視されて  
心から期待した多くの希望によって  
私たちはあなたから奪い去った二隻の船と  
あなたが両眼を涙した遠い地方を見たと信じる  
しかし掠めるだけの私たちの愛する幸せは  
翼の影を映したように見える波が震えるように  
忠実な鳥のように柔らかな巣に戻る  
私たちの過去の愛は 私たちの未来の全てであり  
来ようとしないうちの中におさまっている

権力という幻影よ おゝ下降する道よ！

大きな危険と眩暈 そしてそれはダンテの地獄  
私たちの陶酔が流れ その人の上にある螺旋は  
思ったよりも何時も落下しているのである  
すべてが正しい 高慢の心は虚しいと知りながら  
拷問を選択した 何故なら欲望は  
あの世の見知らぬ空虚な所で起きねばならない  
もしも永遠の詩に黄金の枝がなく

緊張したヴィルギウスが足元を注意しなかったなら  
怒りに対して薄荷や芥子や蜂蜜の食事を  
寧猛な動物に投げつけることがなかったなら  
間違いの次には苦しみがあり 同じ軽率さによっても  
掘った淵からは何も戻ってこないだろう

絶望した魂が根付く眠り  
この恐ろしい遊びの八分音符の音にとりつかれた魂  
疲れを知らない火照りと闘う優しい歌い手  
自分たちの武器を自分の上で振り回す熱狂は  
優しさという波と涙という泉から生まれる

私たちの間に滑り込む極めて薄いカーテンのように  
突然の新鮮な風が私たちの膝を愛撫している  
小さな部落のランプが一つ 位相のように燃えている  
怯える雌牛の走っている音が聞こえている  
夜の中でぶつぶつ言う声が消えている  
大空の下で全てが沈黙し ゆったりとした波の  
銀色の海岸の音の外には何も聞こえない

まるで幸福な時間の軽やかな歩みのように

(ガブリエルへ 一九三〇年四月一六日)

## 春

---

おゝ色彩に溢れ 香りのよい薔薇色の朝よ！  
和らいだ私の魂に幸福を知らせよ！  
おゝ春よ それは嘗てなかった程に笑うあなた  
私が愛したのから別れさせるのはあなた  
あゝ！ 私は何時も致命傷のように感じる  
巨大な自然に私の苦しみは何を持ち込むの？  
それは回転しているがよく忘れ 花々を蒔く  
そして暖かい霧の中で私は涙を乾かす  
記憶もなく 季節によって生き返る幸せ  
新しいパレットは訳の分からない本を消し  
私がそこに書いたのは私の日常と辛い思想  
私の心の亡命地と広々とした海原  
そして観念が掘り下げている深い淵

おゝ大変に長くとりつかれた美人たちの後悔よ！  
嫌疑をかけられた責苦は不幸という陶醉  
単調な未来と間隔を置いた苦痛  
心の冬と雪と悲嘆に暮れた氷.....  
しかし痛みは軽くなり 空を飛んでいるようだ  
私がもう信じないのは 既に蒼白い思い出

全ては美しく純粹だ 心には引潮がある  
緑の草木よりも新鮮な希望が私に再生し  
目覚めた梢から 深みのある金髪の人々に  
縁飾りのような青い雲が生まれている  
その場所は感嘆させた私の両眼をうっとりさせる

—しかし あなたの過去の苦しみを洗い落としたのは誰か？

—あなたの思いを私に言ったのは勿忘草

## あなたの朝のために

---

いとしい肩の上に私が長く口づけするのを感じるの？  
感動した私の魂に思い出が蘇ってきて  
私は夢見る…… そして迷った夜に私が再び見るのは  
あなたの優しい額 眉 瞬く瞼  
子供のように不満そうにしようとする唇  
口づけの花は既に柔らかな頬のため  
朝はこの鉄でできた項に眼を通し  
あなたは海賊だ！ あなたは地獄の匂いを嗅ぎ  
美食家のあなたの鼻孔を思い出させている  
私は 海藻や海の岩場の草の匂いがする  
太陽が成熟させていくあなたに近づく  
愛らしいあなたの美しい首は揺れて微笑む  
まるで樹木の節々に藤が巻き付くようにその時  
私は根の上に根を張って再び関係を結び  
美しい幹はそこから私たちのねじれた上半身を出していた  
こんな風に熱心にこれらの良い香りを吸い込んで  
狂ったような愛撫よりも更に生暖かい私たちの思い出は  
黙認した様子で私たちの花冠を躊躇わせて  
睫毛の下の私たちの両眼は閃光を交し合い  
花々がお互いに愛し合うように私たちも愛し合うのを望んでいた

.....

海からの風はもつれ合う私たちの苦しみの使者  
翼をつけた愛撫の目覚めを届ける

(ガブリエルへ 一九三〇年五月六日)

## 1 偶然と運命

二〇一四年九月二七日に起きた御嶽山の突然の噴火による死亡者は、行方不明六名を含めると六三名の多数にのぼり、火山災害としては戦後最悪とのこと。犠牲者は、殆どが噴石によっての即死であったようです。山頂付近から生還出来た人々もいますが、彼らは「奇跡のようだ」と言います。何故なら、噴石が運良く当たらなかったからです。一步間違えれば死ぬことになっていたのであります。軽トラック位の大きさの石が落下して来るのですから堪ったものではありません。その様な時には神のことを考えます。自分の意志や考えを超えたものを感じる時、私たちは神のことを考えます。「生き残ったのは神様のお陰である」と自然に考えます。

或る男が交通事故に巻き込まれ、かすり傷だけで済んだ時も、「奇跡のようだ」と私たちは言う、とアランは一九〇八年五月十日のプロポを書き始めます。「それというのも、もしも右側に座っていたら死んでいただろうと考えるからです。直ぐに私たちはこの事故を神学者になって読もうとしますし、何か隠された意志があると思います。それは事故が人間の生活に関係して来るからです」と書いていますが、「隠された意志」を感じた時に、そこから神の意志を想定し、そして神の存在を確信するまでになって、まさしく神学者になってその意志を読もうとします。明確に神を見たこともないのに、何故神の存在を信じる人々が多くいるのでしょうか。そこには偶然を偶然と思わない人間の意志とか思想というものがあります。偶然を納得して証明することは困難ですが、そこに一つの定数のような存在を仮定することによって、因果律の必然性を証明すれば、事は容易に理解しやすくなります。そうしてみると、神を信じる人々は物事を容易に理解しようとする人々であるのは自明です。宗教は、〈直ぐに信じる人々〉のものに違いありません。

しかし、他方には容易に神を信じない人々もおります。色々な状況が違っていたなら、又違った結果になっていたかもしれません。全ては偶然に起こったのですから、結果も偶然のものであり、因果律の枠外へ抛擲されて行くばかりです。こうなれば原因も結果もありません。これからも何が起こるか分かりませんから、秩序の維持が困難になり、不安と恐怖が増大します。つまり予定が立たなくなり、人間への信頼がなくなります。又、信頼や信用がなくなれば契約行為も不可能になります。

しかしその様なことにならないように、社会には秩序が確立されています。偶然ばかりでは済まないように、物事は繰り返し行われるように強制されます。物事は疑わしくても、そこに自らの行為の必然性を確立させます。アランは次のように書いています。

「私が書いているこの紙も、何処かの森の樹木でした。如何にしてこの様な紙の繊維となって、他でもない私のペンで書かれることになったのでしょうか。何故このペンはペンであって、大地に還っていないのでしょうか。全ての出来事は等しく疑わしく、等しく必然性があります。塵という雲を箒で掃く時に出来る渦巻は、一つ一つが奇跡であると言えるのです。これら二つの粒子が衝突しないで渦巻になるためには、出来事という驚くべき一致がなければなりませんでした。

もしもこれらの塵の粒子が家に住んでいたなら、若い天文学者たちはそのように考えたことでしょう。そして、もしも彼らが大変な学者になったなら、恐らくその箒を崇めることになるのでしょう」と書いてこのプロポを結んでいます。

〈大変な学者〉になるから崇められるのであって、箒に必然性はありません。そういう意味で言うのですが、偉大な人物の記念館のような建物の中に、その人物の数々の所縁の品が展示されていますが、その人物の偉大性とは殆ど関係が無い筈です。ところが愛用していたペンとか机などが、恰も必然性があるかの如く展示されています。そのペンや机を使用する者は、誰もが偉大になれる訳ではないのですが、誰もが神を見ているかの如く錯覚して仕舞います。「不信心から信心への関係は、聖人たちの誘惑が率直に表しているように、信心の秘めたものです。聖人の誘惑が寧ろ信じることの誘惑であるのに反して、楽しむための誘惑は寧ろ賢者のものです」とアランは『神々』の「尺度」の章で言っていますが、信じることは決して賢明に真実を掴んで楽しむことではないのです。信じることとは、真実を忘却することでもあります。真実とは、疑うことであり、疑うことによって真実が把握出来るようになり、楽しみも自らのものになって来ます。神と共に楽しむことなどはあり得ません。人間の真の幸せは、自ら意識して疑い、何が楽しいのかを意識して見出し、そして自らの意志と共に楽しむことにあります。偶然によって楽しむことは決して長続きせず、まして運命によって幸福になることなどはあり得ないのです。(完)

## 2 恋愛から友情へ

恋愛は青春のシンボルですが、一般に友情は生涯のものです。そして、結婚のことを話すとするなら、アランはこの恋愛と友情のことについて話すだろう、と一九〇八年五月十四日のプロポに書いています。そして、「蜜月の愛は一か月以上ももたないと言っても、誰もが賛成します。多分、例外もあるのですが、そういうことは良くあることで話すには苦勞しません。殆どの場合、もしも結婚が夫婦にとって養老院のような隠れ家を望むなら、友情は少しずつ恋愛に代わるものでなければなりません」とアランは先ず書き始めます。実際に友情と恋愛とでは大きく違っているのです。友情が恋愛に代わるには、その困難は小さくありません。「友情は信頼と誠実という二人の姉妹であることを前提にしています。自分の友人の長所を見て好きになるのは恐らく本当でしょうが、欠点を見ないで好きになるのも本当です。そこから友情の素晴らしい力が齎されます」とアランが書いているように、友情は欠点を見ないようにする努力が必要です。従って友情には議論は必要ありません。お互いに議論して切磋琢磨してお互いに向上しよう、と言われますが、議論することによって失われるものも沢山あります。「議論は全てが私たちの最も確実な考えを危険にする」とアランは『わが思索のあと』の「プロポ」の章でも言っています。つまり友情は、各自の〈確実な考え〉に基づいて〈私〉のことを私以上に知っている者との間に架橋されている関係です。そこには厳しさはありません。何故なら理解している者にあるのは安心であり親切であり、決して厳格さや厳密さでないからです。

「友情が一杯になれば、そこは本当の天国です。そこでの会話は決して止みません。退屈知らずです。悲しみさえも喜びに変えます。それは恋愛という嵐の後の港です」とアランは言います。

それに対して、それでは〈恋愛という嵐〉についてアランは何と言っているのでしょうか。

「ところで恋愛は、阿諛や嘘がなければ前進しませんから、困難があります。何よりも気に入られようとします。雄弁家が喝采や口笛で迎えられるように、彼らの話は相手の微笑に合わせて決められて行きます。その上、人は愛したいと思います。愛することが幸せなのです。決して見られたくないことや見られないことがあります。詩人が言うような恋愛は、目隠しをされているのです」と言って、恋愛が盲目である点を指摘しています。恋愛は、お互いに嘘でも良いから口先で褒めることから開始されます。陸上競技選手の練習のように、褒められることによって最大限の能力が発揮されて来ます。より一層魅力的な人間になろうとします。〈相手の微笑〉が自分のあり方を決めて行くのです。「私はあなたを愛します」と言いますが、もっと正確に言うなら「私はあなたの微笑を愛します」ということです。そして、私はあなたの全てを愛するのではなく微笑だけを愛するのですから、〈愛したいと思い〉ますし、〈愛することが幸せ〉になって行きます。恋愛とは自然と生まれた自主的な感情の表れであると思うのは錯覚です。恋愛とは極めて人工的に創り上げられた感情であり、全てをさらけ出した感情ではありません。〈決して見られたくないことや見られないこと〉は幾つもある筈です。結婚すれば否応なしに殆ど全てを見られたり見たりするので、恋愛感情も殆どの夫婦には稀薄にならざるを得ません。歳を取っても恋愛関係のような感情を保持している夫婦とは、実際には〈見られたり見たりすること〉が十

分でない儘、お互いに隠しているものが沢山残されている夫婦であると言っても過言ではないと思います。詩人が表しているような恋愛は、美しい言葉で表現していても全てを見ていないのであり、目隠しをされているようなものである、とアランは言っているのです。

それでも、歳を取っても仲の良い夫婦は沢山あります。彼らの感情とは、恋愛ではなく友情へ発展したもののようです。アランは言います、「もしも友情へ到達したいなら、詩から散文へ上手に移行しなければなりません。詩の称賛から何かを取り出さなければなりません。率直に話さなければなりませんし、顔付きや精神を信じた日のことを明らかにしなければなりません。そのことは決して後悔や苦悩なくしては行われません。「昔、あなたはそんなことを言うてはいなかっただろうに」。殆ど何時も雄弁家は、昔の話に戻ります」。

歳を取れば誰でも雄弁家になります。隠して置けなくなって全てを話し出します。しかし、何でも話せば良いものでもないのです。感情に流されることなく、理性的に思考することです。あるいは、昔から決められていることから新しいことも発見出来ますから、無視する必要もありません。従って昔からある礼儀のようなものも大切であるとアランは言います、「従って、礼儀の一覧表は広げて置きなさい。儀式の横暴さから逃れること、人が言っていることを考えること、人が考えたことを言うこと、それが結婚における水先案内人のやり方というものです。そこには迂回しなければならぬ嵐の岬があります」と書いてこのプロポを結んでいます。

勿論、〈結婚における水先案内人〉は、昔から決められている儀式にあるものではありません。しかし、儀式が優先されて夫婦や個人の自由にとって都合が悪くなって来ないように、礼儀だけは大切にされた方が良いのです。そして、自由を保持する夫婦にとっての真の愛は、〈人が言っていることを考えること、人が考えたことを言うこと〉によって導かれて行きます。それは人と人とが誠意ある関係で結ばれている友情でもあります。恋愛は、健全であればやがて友情に変わるようです。（完）

### 3 公開講座

我が国において大学で学ぶ者は、二十歳前後の若者ばかりではなくなりました。最近は社会人入学があり、公開講座などが活発に利用されて、大学キャンパスで学ぶ高齢者が沢山います。それはそれで結構なことですが、気懸かりなこともあります。それは純粋に学問を研究するためでない場合もあるようです。つまり学士・修士・博士という学位を取得して、社会的地位の向上に役立てようとする者も多くいるようです。つまり出世や肩書きに利用したいと思う者たちです。勿論、如何なる動機であっても大学で学ぶことは、それなりに意義があることですから、社会人や高齢者の学習を排除しろと主張するつもりは毛頭ありません。

しかしながら大学とは、学生は教員から教育を受ける処であり、教員は自らの学問を研究する処です。極論を言うなら、大学は直接的に政治や社会から影響を受けることがなく、又影響を与えることがなくても十分にその目的を遂行出来る処です。大学に自治が認められている所以でもあります。決して出世や肩書きのために設置されているものではありません。従って、純粋に学問を追究する処ですから、追求する学問が無い学生、あるいは見付からない学生にとっては非常に不似合いな場所でもあります。更に、漠然と教養を深めたいと思って入学する学生にとっても、我が国の場合は益々不都合な場所になりつつあります。何故なら、一九九一年（平成三年）の大学設置基準の大綱化による一般教育と専門教育の基準緩和は、教養教育の衰退を齎しているからです。

そのような意味から公開講座は、出世や肩書きとは殆ど関係のない純粋な学問だけを目的とした講座かもしれません。ところがアランがソルボンヌ大学の公開講座を聴きに行き、予想と違った内容に大変びっくりしたようです。一九〇八年五月十九日のプロポは、二十年ほど前にソルボンヌ大学へ公開講座の最初の授業を聴きに行った時の感想から書き始めています。

「教授は、話すのと同時に考えたことを信じさせるために語っていましたが、俳優のようでした。教授が言ったことは、大変に物足りないものでした。彼は、プロシア人の哲学者であるカントのことを話しましたが、用心しているように話をしました。震える声で辺鄙な田舎で祈っているように小声でした。彼は、自分の講義の中でフランクフルト対独講話条約の承諾をカント哲学から決して理解しないように懇願していました。この思索家がプロシア人であることを忘れる願いをしていました。結局、彼は進行中の軍隊の騒音や国旗の戦きに言及したのです。聴衆は何度も繰り返し拍手して立ち上がり、最後には感激するまでになりました。私はといえば、劇場のようなその部屋から出て教室へ這入って、最早あの部屋には戻るまいと思いました。何故なら、問題が混乱していることに我慢ならなかったからです」。

フランクフルト対独講話条約の承諾とは、普仏戦争（一八七〇～七一）の休戦のために、アルザス・ロレーヌの割譲と五十億フランの賠償金を三年間でフランスがドイツに支払う条約で、パリ・コミューンが成立していた時に行政長官のティエールが一八七一年五月十日にフランクフルトで署名したものです。つまり、その公開講座はカントの哲学についてのものでしたが、この教授は普仏戦争で破れたフランス人に対して、勝利したプロシヤ人としてのカントのことを思い出させたのです。勿論、カントの哲学と、普仏戦争やフランクフルト対独講話条約の承諾とは関

係がありません。ところが、カントが〈プロシア人であることを忘れるお願いをして〉、逆説的ではありますが、カントの哲学とは関係のない人種や戦争のことを持ち出したのです。この教授には、公開講座の場合は政治や社会と関係づけて話す方が聴衆に歓迎され喝采されるという魂胆があることを、アランは見抜いていました。良く言えば、この教授にはサービス精神が旺盛だったのです。しかし、アランは〈問題が混乱していることに我慢ならなかった〉のです。「カントは真実を言っているのか間違っているのかを知るのが重要であるなら、その問題と同時に領土の防衛を論じるのは止めましょう」とアランは書いています。

「彼（教授）は劇場で言うように大袈裟に言いました。劇場であるなら、それで良かったでしょう。そこでは情熱が女王です。笑いや叫び声や口笛が全てを決定します。講師は大衆の奴隷です。作品の質を落とさないように、悪ふざけする人が少しでもいてはなりません。最も小さな出来事でも注意を逸らせます。真面目な聴衆が沈黙しようとしても、他の者が再びそれ以上の大声を出します。新聞が加わります。管理者はうろたえます。そこでの講演は失敗です」。カントの哲学について語る公開講座であったのに、講座は演劇に化し、講師は俳優に化しているのです。その様な教授は、政治家に成れば良いのです。一流の学者や小説家が、政治的発言をしている講演が良く行われています。それはまさしく政治活動であって、文化活動でも教育活動でもないようです。そういう混乱が多くなればなる程、学問や文化が政治に利用されて来ることは明白であり、学問や文化が本来の姿でなくなって来ます。アランも「全ての公開講座は廃止すべきだろう」と結論を下しています。「聴講する人々が叫ぶ権利を持つや否や、最早そこに教育はありません」と明瞭に書いています。教育を受ける者は叫んではいけないものであり、叫ぶ者は質問もしないものです。従って、教授も「歌手や俳優のように」聴衆のご機嫌を取ろうとすると、真の学問の話が出来なくなることは眼に見えています。アランはそのことを知っていたためでしょうか、ソルボンヌ大学で決して講座を持ちませんでしたし、教授の肩書きも終生固辞していました。（完）

## 4 立方体

アランのプロポには、時偶、人物が登場します。一九〇八年五月二日のプロポに登場するのは、まさにカトリック教徒になろうとしている二人の男女でした。アランは二人の訪問を受けましたが、彼らは独創的な思想で有名な人たちでした。女性の方は、アランの古い女友だちです。彼女は出来が良く、何でも知っている頭脳の持ち主です。そのことを話題にして、「それだから彼は気が狂っているのです」ともう一人の男性について言いました。彼女は彼を大変高く買っていて、「それが今少しばかり彼を低く見過ぎていたのだ」とアランは思います。人間は正確に対象を見ることが困難です。

同様なことを、アランは科学が進歩したと言う何人かの人に、「もし立方体の辺を二倍にするなら、当初のものの二倍になった辺は、何個の立方体になるのでしょうか」と質問しました。その答えを見付けるために、先ずアランは二つの方法を言います。一つ目は幼稚園などへ行って、実際に立方体を手にとって各々の辺が二倍の形になるまで積み重ねれば良いのです。わざわざ幼稚園へ行くのが面倒な場合は、遠近法を使って紙に描いてみるのが二つ目の方法です。しかし、この二つ目の方法は上手に描けないと、確実でなくなります。アランは言います、「もしも描くのが下手であったり、想像力がなかったならば、このやり方では不確実になるかもしれません。結局のところ、木製の立方体や鉛筆や紙が無くても、思考によって解答することが出来ます。しかし、これは危険な方法です。何故なら、紙の助けも借りずに生まれるイマジユは、写真屋で動き回る子供と同じ位に動くものでもあるからです。きれいに思い描くのは不可能です。」

ところがアランが質問すると、殆どの方は幼稚園へ行って確かめようとしません。紙に描いてみようともしません。只、頭の中で、想像力だけで解答しようとしませんから、九倍とか四倍とか六倍と言います。時間をかけて忍耐強い人は八倍であると答えましたが、敢えてアランは答えを言わずに、立方体を与えて遊んで貰いました。

そこには他にも人がおりました。背が低くて何でも知っている知性ある男ですが、彼は、「何でも私たちのことを馬鹿にして、そのことを決して隠そうとしない人」でした。彼は八倍である、と正解を答えます。彼は、「木製の立方体も紙も要りませんでした。想像力も使いませんでした。問題は数学の演算に還元して解決していました。辺を二倍にします。そして計算しました。二掛ける二は四で、二掛ける四は八です。この様にして彼は、最も簡単なやり方で苦勞することなく真理に到達しました。彼は他人の成果を利用したのです。彼は言葉を大変立派に器用に処理したのです。快活で才能に恵まれた精神というものは、殆ど何時もこの様に思考します」とアランは言っています。

確かに八倍は正解に違いありません。しかし、何故その答えが導かれたのでしょうか。それは代数学を使うことで真理を導くことが出来たのです。従ってアランが言うように〈他人の成果を利用したのです〉から、決して自分だけで思考したのではありません。八倍という結果だけが正解であれば良い人にとっては、問題はそこで終了しています。しかし、実際に立方体を手にとって八倍を確かめた人は、全てを自分の眼と手と頭で理解します。四倍とか六倍とか九倍と答えた人々は、頭だけで思考することの危険を察知します。それを実感し吟味します。思考するこ

とは、まさに多くの誤謬を含んでいることを学びます。それはアランが最も大切にしたい教育であり思想です。教育とは結果ではない所以です。間違いは、自分にとっての真実を発見する肥料になります。「一輪手押車が発明されます。でも再びそれを考えたりしません。精神はその一輪手押車を押して行くばかりです。それ故に、はいどう、〈英知〉に向きなさい」と書いてアランはこのプロポを結んでいます。一度、一輪手押車が発明されると、人はそれに荷物を載せて押して行くばかりです。一輪手押車は、自分だけの力で押して行くものです。ですから〈英知〉の全てを理解することが可能であることをアランは言っているのです。

カトリック教徒になろうとしている男女も、結局は〈他人の成果を利用〉することと変わらないようです。〈言葉を大変立派に器用に処理〉することと変わりなく、決して信仰と結び付かないことをアランは知っています。自分の〈一輪手押車〉を見つけて、真の自分だけの英知を発見せよ、とアランは言っているのです。そこから真の楽しみや喜びが湧出して来る筈です。真の心の平安が訪れる筈です。何故なら、結果が全ての世界から決別しているからです。真の動機付けが確立された活動へ発展して行くことが可能になるからです。地位や名誉や名声という他人が決する要素は、自分が望む動機付けとは無関係になって来るからです。頭だけで考えると、それらの要素は重要に思えて来ます。しかし実際に眼と手を使って、見て触れて実感すれば、明らかに重要であると思うのは間違いであることが分かります。立方体が、四倍であり、六倍であり、九倍であると思うことは間違いであることが分かります。（完）

◆十二月七日（日）に東京・吉祥寺の「永谷ハウス」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）の〈川柳忘年会 ―あわせて『一読者の戯言』（北岡善寿著）出版のお祝いの会〉に参加した。題詠「隠れ蓑」と自由詠を三句ずつ計六句を予め投句し、当日の参加者による投票での選考が行われ、全六十六句の中から各々一等、二等、三等及び佳作を決定した。当日の選考結果については、堀口精一郎氏が「覚え書き」として、電子書籍の同人誌「風狂」において詳細に報告されているのでここでは割愛するが、ご参考までに私の作品だけを全てご紹介する。

- 1 独裁の妻には要らぬ隠れ蓑（題詠）
- 2 カネにコネ社名学歴隠れ蓑（題詠）
- 3 隠れ蓑無ければ言えぬ野次の人（題詠）
- 4 電子化で世界中が井戸端化（自由詠・佳作）
- 5 相続の話になると直ぐ良い子（自由詠）
- 6 漁師にはセンカクよりも赤サンゴ（自由詠）

（1句、カカア天下。2句、寄らば大樹。3句、東京都議会。4句、思想が無い。5句、トマ・ピケティ氏の影響も。6句、中国船。）

又、当日は二〇一四年八月十五日に刊行された北岡善寿著『一読者の戯言』（待望社・二〇〇〇円＋税）の出版をお祝いした。会は先ず、北岡氏及び本書についての紹介が行われ（高村昌憲）、「『一読者の戯言』についての講演」として「ポツダム宣言の受諾について」の講演が行われた（中平耀氏）。次に吉祥寺ビアホールへ席を移して、著者からの挨拶があり、出席者諸氏の祝辞が述べられると共に祝杯が挙げられた（司会・堀口精一郎氏）。北岡善寿著『一読者の戯言』は、まさに卓越した思索と格調高い言葉で書かれた良書であり、アランが「議論は全てが私たちの最も確実な考えを危険にする」と言っているように、〈最も確実な考え〉に溢れていて議論の余地が無い稀有な一冊である。

◆三月十二日（木）に東京・青梅で、五十年來の友人たちと一緒にテニスをしたが、不覚にもコート上で両足が纏れて転倒して左鎖骨を骨折した。スポーツによる〈名誉〉の負傷である。当初は大したことがないと思っていたが、CT検査などを受けると骨が潰れていたり、大きくずれて骨折している箇所があったりした。この儘ではなかなか元に戻らないとのことであったので、四日間であるが思い切って入院して、整形外科で手術を受けることにした。生まれて初めての骨折であり、全身麻酔であり、手術であった。半年後には再手術をして、プレートを取り出す予定である。骨が付くまでは静かにしていなければならない。でも、利き腕の右手は自由であるから、署名したり文字を書いたりすることは可能である。病院で看護師さんたちにも言われたが、骨折が右鎖骨でなくて不幸中の幸いであった。又、自宅に戻ってからはパソコン操作も何とか可能である。しかし、今号の「パープル」に平行して、同じく電子書籍の同人誌「風狂（二〇一五年版）」や、紙媒体の日本仏学史学会誌「仏蘭西学研究」第四一号の編集などが重なり、厳しい作業となった。ところが文字を書いたりパソコンのキーを叩いたりする当たり前と思える行為が、こんなにも充実感があり嬉しい感情になることを、怪我をしてみても初めて感じた。肉体的な不

自由を超越したような、まさに〈足るを知る〉思いであった。そして、日常の不便や不測の事態を助けてくれた家族の親切が身に染みて有難く感じられた。衷心より感謝したい。以上の様に怪我をして良いこともあったのである。蛇足ながら、もう一つ良いことがあったのでご紹介する。それは或る看護師さんの言葉であるが、「高血圧は良いことが何も無いですよ!」。近日中に内科医にも行きたいと思っている。

◆四月五（日）に東京・調布の神代植物公園で行われる「風狂の会」恒例のお花見があった。残念ながら私は骨折のため欠席した。（以下は、なべくらますみさんからの報告により、簡単にご紹介する。）当日は生憎と天候が余り良くなかったが、正門前の集合場所に集まった風狂人同士で園内へ入場したとのことである。今年ソメイヨシノの開花は例年より数日早かったが、まだまだ花は咲いていて、十分に楽しめたようである。お花見の後は、馴染みの調布駅前「すし店三崎丸」へ行き、そこでも数人が合流して二次会に移った。参加者は、北岡善寿、倉田武彦、富永たか子、長尾雅樹、中平 耀、なべくらますみ、原 詩夏至（敬称略）の七名であった。

◆「風狂の会」創立二十周年を記念して二〇一四年八月に創刊した電子書籍の同人誌「風狂（2015年版）」〈<http://p.booklog.jp/book/93185/read>〉に、詩や散文の新作を毎月公表している。又、「風狂（2014年版）」〈<http://p.booklog.jp/book/90172/read>〉も公開中である。パブの電子書籍作成・販売プラットフォームから無料で検索出来るので、スマートフォンやパソコン等を利用してご一読下さい。

◆五月二五日（月）～三〇日（土）十一時～十八時（最終日十七時）に「高村喜美子展」が、画廊「宮坂」（中央区銀座七丁目十二番五号・銀星ビル4F）TEL 03（3546）0343 〈<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~miyasaka/about.html>〉にて開催される。東京では二年振りの個展である。近年は主に大阪府池田市で毎年のように個展が開催されて来たが、今回は満を持しての開催である。油彩画が中心である。実際に観るものだけを、直接的に自主的に描く画境を大切に保持し続けている画家の姿勢が、奇抜さを狙わない静謐な独自の世界を何処まで描き出しているのか、自らの眼で確認するのが楽しみな個展である。まさに「観ることとは、観たいと思うことである」（アラン）。そして、何時まで観ても決して飽きることのない花々やヴェネチアの風景などが、絵画鑑賞の醍醐味を教えてくれるに違いない。四十年以上に亘り、休むこと無く具象を追究し続けて来た奥深い作品群は、観る者を癒す快い記憶の表象を創造し、何時までも長く生き続けて行くものと思われる。（入場無料）

◆多くの詩人たちなどから紙媒体による新刊の詩集、単行本及び詩誌等を頂戴したが、失礼と思いながらも殆どお礼状も差し上げていない。最近ご恵贈賜ったものの表題、著者名（発行者名、編集者名又は執筆者名）及び出版社名などを掲載して、この場を借りて深謝する。なお、詩誌等の刊行物は最新号のみを表記した。（順不同・敬称略）

詩集『昭和八十八』和田文雄（土曜美術社出版販売）

詩集『蠢くものたち』なべくらますみ（土曜美術社出版販売）

詩集『叙事詩 原郷創造』原子 修（共同文化社）

詩集『長編詩 ひな』秋山基夫（ペーパーバック）

詩集『ジャンピング・ビーンズ』福島純子（土曜美術社出版販売）

詩集『時調（三行詩）第十六集』趙 末雄ほか（時調の会）

詩集『妻を恋ふる詩（Ⅱ）』大塚欽一（泊船堂）  
『世界の恋愛詩華抄（Ⅱ）』大塚欽一・大塚綾子（泊船堂）  
『中四国詩集・二〇一四（第五集）』中四国詩人会（和光出版）  
『永遠の時間、地上の時間』原 詩夏至（コールサック社）  
『陸軍看護婦』阿武千代（文治堂書店）  
『戦後サークル詩論』中村不二夫（土曜美術社出版販売）  
「騒」一〇〇号・終刊号（暮尾 淳・坂上 清）  
「櫂」二号（なべくらますみ）  
「風樹」十七号（大塚欽一）  
「ERA（第三次）」四号（川中子義勝）  
「竜骨」九五号（高橋次夫）  
「飛揚」五九号（葵生川 玲）  
「詩的現代（第二次）」九号（愛敬浩一・樋口武二）  
「駆動」七三号（飯島幸子）  
「ぱぴるす」一一一号（岩井 昭・頼 圭二郎）  
「詩霊」創刊号（黒羽英二）  
「この場所」十一号（鈴木正樹・谷口ちかえ・三田 洋）  
「ココア共和国」十六号（秋 亜綺羅）  
「山脈（第二次）」十三号（鈴切幸子）  
「SUKANPO」十八号（田口三舩）  
「解纜」一五七号（西田義篤）  
「現代詩研究」七四号（渡辺元蔵）  
「極光」二三号（原子 修）  
「流」四二号（西村啓子）  
「幻竜」二一号（舘内尚子・清水正吾）  
「洪水」十五号（池田 康・谷口ちかえ）  
「WHO'S」一一四号（中村不二夫）  
「ZOWV（ゾラヴ）」通卷四一号（正木ノリオ・原 詩夏至）  
「人民の力」一〇二九号（谷口 巖）  
「月刊おたる」六〇七号（森元勝章・藤森五月・玉井耕平）  
「飛火」四七号（岡谷公二・石崎晴己）  
「L' ARCHE」二五号（浜田 泉）  
◆「パール」第四七号は二〇一五年十一月一日発行予定である。

高村昌憲個人誌 パープル (第46号)

2015年5月登録

<http://p.booklog.jp/book/98025>

著者：高村昌憲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/98025>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/98025>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社ブックログ